

(政務活動費用)

(様式1)

出張報告書

令和5年2月12日

釧路市議会議長 松永 征明 様

会派名 自民市政クラブ

代表者名 草島 守之



次のとおり、政務活動費による出張を終えましたので報告します。

受命者	三木 均、金安 潤子
出張先	台湾（台北市、花蓮市）
期間	令和5年1月8日～令和5年1月13日
用務	花蓮市意見交換、台北市立動物園訪問等及び観光プロモーション 出席
調査（研修） 結果等の概要	別紙参照
備考	

- 注) 1 資料等がある場合、添付すること。資料は、事務局経由で会派へ返却するので、本出張報告書（原本）とともに会派で保管すること。
- 2 調査結果等の概要は、別紙による記載も認める。

石梯港について

視察日：令和5年1月10日（火）

視察地：花蓮県石梯漁港

視察参加者：畑中 優周、大越 拓也、松尾 和仁、金安 潤子、岡田 遼、板谷 昌慶、三木 均（文責）



初めに、視察の際、石梯港と漁業についてご説明を頂いた花蓮県豊浜郷公司秘書 鄭立愉様はじめ東部賞鯨の皆様がこの場をお借りして御礼を申し上げます。

まず、石梯港のある石梯湾（花蓮県豊浜郷石梯湾）であるが、台湾の北東部、台北から特急で約2時間半程の花蓮市の郊外に位置し、太平洋に面した非常に風光明媚な地域の中にある。

同港は、石梯湾石梯坪の西北に位置し、急峻な山々が背後に迫る漁港である。そのため沿岸から数キロ先は水深が急激に深くなる天然の良港であり、この地形が豊潤な海の幸を当地域にもたらし、台湾有数の漁港として賑わい溢れる港となっている。

魚種に関しては、カジキマグロ、カツオ、トビウオ、マンボウ、さわら、シーラ、ウナギの稚魚など非常に豊富であり、うなぎの稚魚をはじめ日本に輸出されているものもあるとのことである。

沿岸部は定置網漁が盛んであり、季節に応じて豊富な魚種と漁獲高を誇っているが、この定置網漁は日本の技術によるものであるとのことである。また、石梯港は台湾ホエールウォッチング発祥の地であり、外海でクジラに出会える確率が台湾一であるため、夏場はホエールウォッチングのメッカとなっている。賑わい溢れるセリは朝7時半と午後4時に開かれ、豊富な漁業資源を生かすべく観光に力を入れている点もこの港の特徴であり、リーズナブルな価格でレストランと鮮魚の販売などを行っている。漁業と観光がまさに一体となって石梯港の賑わいを創出していることが大きな特徴であり、当日同行して頂いた台湾で著名な料理人である王聖翔氏もこの地の特産物をいかしてレストランを経営している。謂わば「獲る、食べる、観る」が三位一体となってこの港に繁栄と賑わいをもたらしていることが非常に示唆的であった。

花蓮市公所（市役所）表敬訪問並びに歓迎レセプションについて

視察日：2023年1月10日（火）

視察地：花蓮市公所（市役所）

視察参加者：畑中 優周、大越 拓也、松尾 和仁、三木 均、岡田 遼、板谷 昌慶、
金安 潤子（文責）

昨年友好交流協定を締結した花蓮市市役所を市長、教育長はじめ、鉤路日台親善協会会員と共に表敬訪問。訪問団到着時、市役所職員から盛大な歓迎を受け、その歓迎ムードの中、セレモニーが行われた。

初めに昨年行ったオンラインでの締結式の映像を確認、その後、魏嘉彦市長、蝦名市長の挨拶、また花蓮市民代表会 李振璋氏からも貴重なお話をいただいた。今日が交流のスタートであり、お互いの意思疎通、交流促進を確認し、今後も観光面だけでなく、産業経済などでも交流を深めて行くことを確認した。

花蓮市側からは、花蓮市から公式訪問を今年の5月頃を想定し、鉤路へ訪問する旨の申し出があり、詳細は現時点では未定ながら、チャーター便での来日を想定している状況で市としても受け入れの体制を早急に構築していく必要があると感じた。

夕刻からは歓迎レセプションが開催され、鉤路市の訪問団と花蓮市の幹部、議会代表者との懇親を深めた。開会挨拶の際にも、改めて両市の友好促進を確認しあい、終始なごやかな雰囲気であった。

アトラクションでは、台湾先住民タロコ族の男声二重唱が披露され、美しく力強い歌声が会場に響き渡った。鉤路側からは、観光大使の真氣さんによる歌を披露した。

友好促進を願いつつもコロナ禍により台湾との往来がかなわなかったこの3年間。改めて相互交流は人的な交流が必須であり、今回の訪問が持つ大きな意義を実感したところである。



台北市立動物園表敬訪問について

視察日：2023年1月11日（水）

視察地：台北市立動物園

視察参加者：畑中 優周、大越 拓也、松尾 和仁、金安 潤子、三木 均、板谷 昌慶、岡田 遼（文責）

台北・花蓮表敬訪問の4日目、2023年1月11日（水）13:00より、台北市立動物園にて、釧路市動物園より、台湾との友好の証である「ビッグ」と「キカ」のヒナ「リーホー」の誕生を祝し、表敬訪問と台北市立動物園にて開催していただいたセレモニーに参加をしましたので概要を報告します。

表敬訪問では、教育センターで開催中のタンチョウ写真展に参加しました。数多くのタンチョウの写真が並び、釧路市で撮影された写真も展示されていました。



その後、タンチョウ舎前にて「リーホー」の誕生セレモニーが開催され、市長の挨拶では、『日本の特別天然記念物の「タンチョウ」「マリモ」が台北市立動物園に渡っていることは、台湾との信頼関係を意味し、今後もタンチョウの飼育方法など学術交流を深めて頂きたい』と伝えられました。



また、台北局専員や釧路市観光大使の真気さんからの挨拶やタンチョウにまつわるクイズなども開催されました。なお、タンチョウの雛の名前である「リーホー」とは「こんにちは」という意味だそうで、投票にて決定されたと伺いました。

以上、報告と致します。



新平溪煤礦博物園區との友好館協定締結について

視察日：2023年1月11日（水）

視察地：台湾炭鉱博物館

視察参加者：畑中 優周、大越 拓也、松尾 和仁、金安 潤子、三木 均、岡田 遼、板谷 昌慶（文責）

我々は、昨年友好交流協定を締結した花蓮市への表敬訪問した後、11日には台北市立動物園、台湾炭鉱博物館を訪問しました。

釧路市と台湾は、旧太平洋炭礦初代社長の木村久太郎が戦前に台湾で炭鉱を開発し台湾の財閥が同社の経営に参画したほか、両地ではともに旧三井鉱山の技術者によって最新技術が導入されたなどの関わりがあり、この度、釧路市立博物館と、新平溪煤礦博物園區（台湾炭鉱博物館）は、産炭地同士で交流を図る「友好館協定」を締結しました。



同博物園區は閉山した炭鉱を活用し、2002年に設立。台湾の炭鉱に関する技術や文化を展示しているほか、閉山当時のまま保存されている施設や今回我々も体験乗車をしたトロッコがあり、日本人観光客にも人気があるといえます。

釧路市立博物館が国内外の博物館と提携するのは初めてで、互いに現地を訪問して調査するほか、今後、人的交流を通じて関係を深めていく予定であり、釧路と台湾の交流促進に向けて親睦を深め、台湾炭鉱博物館にて、ゴン館長らと4項目の連携協定を結びました。連携内容は①館長・学芸員交流②調査研究交流③展示交流④その他の交流事業。

締結式への参加者は、釧路市から22人、台湾からゴン館長や政府関係者など約30人が出席。市長は、ゴン館長との締結書に署名した際に、「コロナ禍による厳しい状況下でも締結が実現でき喜ばしい。互いの市民を巻き込んだ交流を進めたい」と今後に期待を示し、台湾炭鉱博物館と既に友好提携を結んでいる田川市石炭・歴史博物館（福岡県）を含めた3館で交流を進める考えを示し、年内には釧路市立博物館が台湾の炭鉱を紹介する企画展を開催し、台湾炭鉱博物館の副館長が釧路を訪れ、雄別炭鉱の跡地や釧路コールマイン（KCM）を視察する予定なども発表しました。

更に釧路市立博物館の石川孝織学芸主幹は「石炭を通じて釧路が世界とつながっていると多くの人に知ってほしい。台湾の学芸員も釧路との縁に関心を示しており、共同で調査や研究を行いたい」と話しており、今回の訪問をきっかけに、釧路と台湾のつながりをさらに発展させていきたいと意欲を示しておりました。



今後、花蓮市との更なる友好関係を築きつつ、相互の観光客誘致につながることを期待するとともに、相互の文化交流も深めていくことが重要だと認識しました。

地元先住民文化について

視察日：2023年1月12日（木）

視察地：烏來（ウーライ）泰雅民族博物館

視察参加者：畑中 優周、松尾 和仁、金安 潤子、三木 均、岡田 遼、板谷 昌慶、大越 拓也（文責）

烏來泰雅民族博物館は、新北市烏来区にある地元先住民文化に関する博物館である。

台湾には原住民が16部族あり、2022年の統計調査によると約58万人、全台湾人口数の2.48%を占める。その中で、人数が一番多いのはアミ族（約21.7万人）、次はパイワン族（約10.3万人）、三番目はタイヤル族（約9.4万人）。

ウーライは台北から南におよそ28キロメートルに位置している。新北市の中で、面積が一番広い（321.4平方キロメートル）が、人口密度が一番低い（僅か6299人）所である。ここに住んでいる原住民は2934人（男性1,433人、女性1,501人）で、人口の9割はタイヤル族（2,653人）。

ウーライのタイヤル族は、元々南投県仁愛郷に住んでいた。その後、険しい山を踏み越えて、この地にたどり着いた。

ウーライという地名の意味は「熱い水（温泉）」のことである。ここの温泉は弱アルカリ性炭酸泉で、日本統治時代（1903年）ウーライ番務史員駐在所浴場が設置された。それ以来、ここは温泉と桜の名所として知られるようになった。

ウーライタイヤル民族博物館は2005年9月オープンした。この施設は台湾唯一原住民の視点から設立した博物館である。

タイヤル族の起源は高い山の中に大きな岩があり、ある日その岩が割れて、その中から二人が出て一人が男、もう一人が女、その二人はタイヤル族の先祖だと言われている。タイヤル族と言えば、文面（入れ墨）、織物、祖霊 uTux（先祖の魂）、祖訓 gaga（先祖の戒め）が有名である。

文面（入れ墨）

一般的には男性は額とあご、女性は額と頬、胸、腹、手足に入れ墨をしている人がいる。文面（入れ墨）の条件は、男性は敵の首狩り或いは猟ができること。女性は完璧な織物を編むこと。入れ墨は一人前の証となり、入れ墨をした後は、結婚ができ、また、死後も先祖のところへ行けると言われている。文面（入れ墨）は単なる美的ではなくて、身分と地域により模様も多少違う。日本統治時代、文面は未開化野蛮な行為と認定し、1913年文面禁令が出される。しかし、タイヤル族の人たちは、こっそり入れ墨をし続けたそうである。2019年9月14日、文面したタイヤル族の最後の一人（97歳、女）が亡くなった。

